

第 80 回 春の院展 同人解説文

下田 義寛 《 刻を聴く 》

もの心ついた時から、犬と鶏は身近な存在でした。早朝から処々でたくさんの小鳥たちが鳴いているなか、オンドリの刻の声は際立ち、屏や木の高いところで陣取り、特に立派な赤い鶏冠は威厳があります。古い柱時計がボンボンと鳴り朝を迎えます。

オンドリは、野生の雉の仲間のセキショクヤケイを飼いならして鳴き声やしぐさなどを楽しんだ人間と有史以前から生活をともにしてきました。

オンドリは今も刻を聴いています。今は鳥インフルエンザのこともあり鶏そのものを見かけなくなりました。

幸いシロレグホンのオンドリを写生する機会があり、自然の不可思議さに挑んでみたくなりました。

伊藤 彰耳 《 あすに向かう道は 》

荒い6番 細かい13番の岩えのぐを使いました。肌は瑪瑙末（天然）バッグに花緑青（合成）6番を使ってみました。

はじめにまったく題材とは関係なく太い筆でゆっくりと線を引き、墨の濃さは水をかなり入れ薄くして10回を目安に引いています。

ドーサを引いて描くとかなり濃くなります。その上から大下図をのせ念紙取りをし、本紙に写しました。

田淵 俊夫 《 旅立ちの朝 》

さぁ朝だ。旅立ちの時が来た。

那波多目 功一 《 遊泳 》

鯉の動きの勢いが、様々な白浪の弧を描き、無数の泡が現われては消えていく様は、人の世の時の流れにも似て興味が深く、感じながらの制作・・・。

手塚 雄二 《 阿龍 》

寛永寺根本中堂天井に描いた叡獄双龍は天空から降りてくる阿吽の龍です。

本作はその阿龍を描いたものです。

福王寺 一彦 《 月星花 》

「月星花」は星たちが多くの花になり、そして花が星になる様子を描きました。

宮廻 正明 《 通り縫 》

巴里の街角を 通り縫る 人かげを見た 時

私が泳ぎつきたかった ところは 向こう側では なく

上の方だった

今 からでも まだ 修正は きく

抽象を纏った印象へ

平板から離れ陰影へ

西田 俊英 《 無数の生命 》

ここにも…小宇宙がある。

苔で覆われた伐り株に、夜半から雨が降った。

霧に煙る今朝は、密集した苔の穂先のそれぞれから無数の水滴の「いのち」の源が輝いていた。

自然の中に真実の美しさがあった。

松村 公嗣 《 道 》

果てしなく続く道はいったい何処へ向かうのでしょうか。中国ウィグル自治区トルファンを訪れた折、ふと目に入った道を描いてみたくなりました。

「僕の前に道はない。僕の後ろに道は出来る。ああ自然よ。父よ…。」高村光太郎の著書『道程』にある有名な一節が頭に浮かびました。

遠い異国にひとりおりますと、風景の中に普遍性を強く感じるものです。

大矢 紀 《 山路にて 》

私の住んで居る小田急線柿生の里は昔、源義経の家人亀井六郎の山城があった所で起伏に富んでおり、今は幾分少なくなったが竹林があり、

普通の杜とは一味違う、なんとも云えぬ風情を感じさせてくれる。

「 山路来て 何やらゆかし すみれ草 芭蕉 」

高橋 天山 《 生霊・六條御息所 》

いはゆる執着心を置き捨てることが出来ぬまま生きる、あるいは死ぬ、ことがそう珍らしくもないのが憂き世というものでありましょうか。

源氏物語に登場する六条御息所は高貴な出自故に光の君を許すことはできても、おのれの自尊心を鎮めることは出来ず、生霊と成り果て、

ついには葵上をとり殺す。しかも“無意識のままだった”と言うのですから、いやはや底知れぬ闇と言うより他ありません。

吉村 誠司 《 城 》

その当時、天にも届く建物に見えたと思います。

天に向かって聳え立つ城を描きたかった。

村上 裕二 《 「翔るよ」と言った 》

勢いよく駆ける馬に騎手が声をかけているイメージ。色味を絞り、画面からはみ出る様に描く事で、臨場感を引き寄せたかった。

幼少期より漫画やアニメで育ったぼくの絵面好みは、何歳になっても当時と変わらない。登場するヒーローは何処か謎で、時に孤独。

人間味が漂い、優しくて元気。動物とも仲が良い。

「進めー!!」ってね。

倉島 重友 《 兎の庭 》

小さく可愛いくて、囁みついたりうるさく鳴くこともない兎は、子供の格好の友達。

私も子供の頃、兎を飼っていた。

愛らしい兎と遊ぶのが楽しかった。我家の近くに小動物公園を見つけ久しぶりに兎の可愛さに触れた。

清水 由朗 《 緑閃光 》

“緑閃光”とは、空気の澄んだ水平線に太陽が沈み切る瞬間、太陽と水平線の接点が緑に光る現象で、

ハワイ・ホノルルにて一度だけ目にしたことがあります。

過ぎ行く時間とともに薄れゆく記憶の一瞬を呼び戻して描いた作品になります。

齋藤 満栄 《 木瓜 》

知り合いのお宅の木瓜を絵にしてみました

小田野 尚之 《 駅 》

これまで院展の出品作にも何度か描いたことのあるローカル線です。

20 年以上前に廃線となりましたが、数年前にこの近辺を訪れたことがあります。線路や駅舎などは当然ながら撤去されていましたが、「あの頃」を知っている私には、昭和初期に造られた赤い可愛い電車が美しい田園風景の中を懸命に走る様子が、鮮明に思い出されました。

宮北 千織 《 曙 》

家の近くに立派な曙椿が咲くお宅があり、頂いてきてはスケッチをしていました。

今回はその椿の樹と、人物を組み合わせて描き「曙」としました。

大野 逸男 《 鮎 》

鮎を釣るのに懸命で、ゆっくり観察する暇はありませんでした。制作途中で、弟や息子から魚形や色を指摘され、鮎の動きを掴むことが難しく思われました。描いては直すことの繰り返しでした。

北田 克己 《 風のこと 》

逆風だ

遠くへ

村岡 貴美男 《 睡蓮沼 》

画面の外へも物語が広がってゆくように画面構成をしました。

井手 康人 《 不二 》

富士山の威容を墨だけを使い描いた。

白をいかに画面に留め情感を出していくか、二度とは無い瞬間に筆先の一滴に祈りながらの制作でした。

前原 満夫 《 白八汐 》

写生地は南アルプス、川根本町大札山。

ブナの森の瑞々しい緑の中を歩いていると出会える白い花です。

気候変動によるものか、最近随分少なくなってきたように思えます。

何とか長く残って咲き続けて欲しい、貴重な花です。

中村 譲 《 午前の水路 》

街中に張り巡らされたベネツィアの水路。

日が高くなるにつれて狭い建物の隙間から光が射して来ました。

鏡の様な水面にスポットが当たる様です。

國司 華子 《 避雷針 》

「ひらめき」の瞬間を形にしてみようと、眼を開き逆毛立つ猫を描き始めたものの、ふと、これってなんだか雷に打たれた状況に似ているではないかと！

ああ、去年の作品が『風神 一鎗ノ図一』だったのだから、今年は待ってましたとばかり『雷神』にすればよいものを…

いつも遠回り、すんなりとはいかないのです。

藁谷 実 《原初へ》

コンクリートやアスファルトに覆われた環境の中で、日常さほど意識もせず便利に暮らしている私だが、城ヶ島海岸に見られる地層が露出し、海水に侵食された光景は、ここが惑星であることを思い起こさせ深層心理と結びついて原初へと誘う。

岸野 香 《重奏》

すっきりと立ちならぶ樹樹の枝の重なり。冬の朝日が射し込み、印象的な影を落としていました。耳を澄まし、深呼吸する静かな時間になりました
女子美術大学の隣、県立相模原公園での取材です。

松本 高明 《初夏の花》

ヤグルマギクは五月の代表花です。丁度この頃かざる鯉幟の柱の先の矢車に似た花形をしていて、ヤグルマソウと呼ぶ人のほうが多いようです。
子供の頃、この花の前で食べたイバラ餅（サルトリイバラの葉で包んだ餅）を思い出します。

番場 三雄 《三面川》

三面川は新潟県、北部に位置する村上市にあります。三面川は古来より鮭の遡上する川として知られており、毎年秋、10月末より12月初旬まで産卵のため遡上する鮭の姿が見られます。川幅いっぱいに設けられた梁場に婚姻色の薄紫色をした鮭の躍動感を表現したいと努めました。

高島 圭史 《きいろいひと》

「きいろいひと」の源は三井寺に伝わる秘仏「黄不動」です。
ある高僧の夢に現れた不動明王が、虚空にすっと立ち、黄金色に輝く姿で描かれています。
この「きいろいひと」では、人物の背景に配した布を常緑樹の葉のような渋く濃い緑色にして私なりの虚空とし、人物の周囲に配した花と蝶の模様に動植物の生命感を託して、ひとひとりの姿を描いてみようと思いました。

山本 浩之 《ふざける》

本当は絵はとても自由なはずなのに、知らずのうちに私は私自身の自由を制限しているのではないか、と思い当たりました。
これまでの自作に比べて動的な要素を、と思い模索しました。
そしてもっと自由と思いながらも案外それらは思うようにいかず、なんだかこの絵はチグハグなままになってしまったように思います。
率直に、そして私なりに何か少しでも新しい要素や試みを含めながら、研究を重ねていきたいと思います。

山田 伸 《小夜》

野の隅で密かに繰り広げられる宴
生命が何処から来て何処へ向かうのかと同様に
何気ない日常の中で誰に気づかれるともなく営まれる事柄
世は目に触れる事の出来ぬ事象で溢れている。

前田 力 《窓辺の俑》

窓際には、観葉植物と古びた俑が静かに佇んでいる。怪我のため、ベッドで過ごす時間が長くなり、それらを眺める時間が多くありました。
右腕を動かせない日々が続く中、カーテンの隙間から差し込む光が、ふと心に希望をもたらしました。